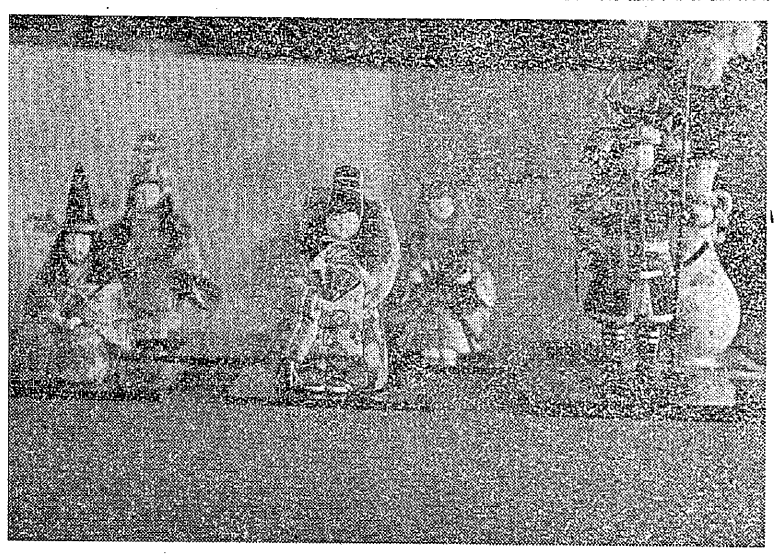
手作り真多呂人形

趣味に生きる猿渡さん



猿渡さんが、丹精こめてつくりあげた人形の数々。容姿に、たとえようのない美しさがあふれている。

▼…趣味の一つとして、長年真多呂人形を造り続けている人がいる。主婦の一人―猿渡静子さん（市内城町二丁目七十番地）で、すでに昭和五十二年十月東京の家元から〝教授〟の資格を与えられたほどの腕前。

夫の孝良さんは、三川鉱の坑外の仕上職場で働いているが、猿渡さんがとかく金のかかるこの趣味に生きることのできるのも、孝良さんのささえがあればこそだろう。

▼…材料は、頭部や手などすでにできあがっている品を使うが、かんじんのボディはノコクズと粘土を松ヤニで丹念に固める。それに、自分の手で裁った正絹の着物を、フノリを使って貼りつけながら着せていく。そしてできあがりとなる。

写真の人形が作品のなかの一部で、向かって左から、前列が船弁慶、翁（おきな）に山中鹿之介で、後列が羽衣に猩々。

一般に出回っている、目が大きく、体がすんなりして、何がなしに現代風な桜人形に比べると、まず目が細長く優しく、着物が絢爛で、全体が発散する気品が特徴か。見つめていると、じーんと心に響いてくるものがある。

▼…猿渡さんが、真多呂人形づくりにとらわれたのは四十六、七年頃。男の子（孝治君。中学二年生）こそめぐまれたものの、ほしい女の子がさずからず、聞けばそのため女の子への憧れが真多呂人形づくりへの執心に転じたものらしい。

「人さまから、売ってもらえまいか、と希望されることもありますけれど、いつくしみ育てるような思いでつくった人形を、金に換えるなどという気持ちにはなりません。何かのお祝いに、お世話になったお家などへ差し上げることはございますが、そんなときでも、どんな場所に飾ってもらえるのかひとこと聞かずにはいられません。可愛いいですからね」

趣味を大切に育ててきた人のしあわせを思わずにはいられぬ。

芸文春新

詩の部

マイ・ペース

高校一年　平田庸一

息がつまるような
無理なことを
してはならない

相手のペースに
つられても
ならない

ただ自分のペース
時には速く
時には遅く
何も考えずに

ただ自分のペースを
守りながら
それがどんな
結果であっても
悔いはのこらない

×

父は、三川指導部の平田光男さんです。

三川指導部有明分会

三川指導部　赤川富幸

年頭に停年になるおっさんも
幼な子の父親の若者も
差別にへこたれず耐えぬいた顔
二十年間頑張った仲間よ

合理化で鉱統合になり
新しい職場に移った
坑内と坑外組み合せの十五分会
有明坑に二十五人ただ一つの三池労組分会
ついこの前分会初めての団結旅行へ
温泉宿で大いに飲み大いに歌い
ぐでんぐでんになるまで
飲んで酔っぱらった
ばってん
しめくくりの職場分会の歌は全員しゃきっとして
女中さんも一緒に大合唱
「貴様と俺とは同期の桜

同じ三池労組の頑張る仲間
有明坑に咲いた花
三池の赤旗守ろうよ」

苦しみも楽しみも
お互いに分け合って
昨日も今日も頑張っている
明日からもさらにはりきろう

我等
三川指導部有明分会

停年を前に

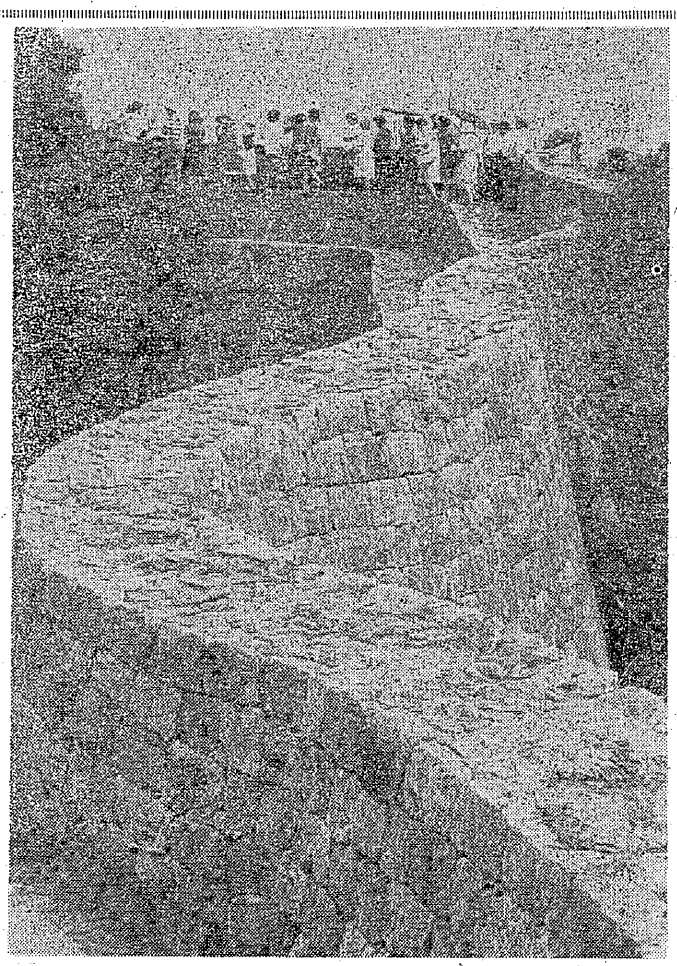
三川指導部　猿渡宗男

みんなから
あんたまだ若かばん
いわれているうちに
この四月で停年を迎える
何時の間にこんな歳月が流れたのか
思えば坑内にさがって三十三年
長い歳月のなかで
いろんなことを学び
いろんなことを経験し
結婚、子供、組合、闘争
分裂、差別、抗議スト、デモ
災害、爆発
そして委員会、討議、交流
夜おそくまで続いた話合い
みんなしあわせをつかむためだった
坑内の仕事　それは
大部分が力、力、力
とくに腰、肩、手、足
力を出さないとゼニにならず
俺は根性で耐えてきた
さいわい大きな怪我もせず
これまでがんばってきた俺
会社がしこたま
もうけをためこむために
多くの仲間が命を絶っていったが――
あんたもうすぐ停年でよかのう
みんなからいわれる
だが
やめた人たちはいう
世の中はそうあまくなかばい
やっぱり仕事ンできるときが花
とはいえ
これから先が
組合員も大変なんだ
頭のなかで複雑に
いろんな思いがかけめぐる
今日、この頃

話し合い

三川指導部　平田光男

昨夜
あんなに討論し
激論したが
今朝はさわやか
これが三池労組員に違いない
今日一



写真〝沖縄〟

写真は、〝沖縄・100万人の写真コンクール〟に入選した米本隆義さん（四山指導部）の作品。日本放送協会賞を獲得した。48歳。米本さんは〝ママさんバレー写真コンテスト〟では、特選に選ばれるなど、確かな腕前。心から今後を期待しよう。がんばってください。

雪ウサギ

北　耕一

公園の吹きだまりの雪で
父と子が雪ウサギをつくる
故郷にいた時は憎かった雪
それを手で丸めていると
なぜか無性になつかしい
赤い目のナンテンと
耳にしたツバキの葉は
雪知らずの都会で育った
妻の飾り花からのもらいもの
とっておきの朱塗りの盃に
コンモリともった雪ウサギ
正月最後に残った休日の
働く一家のやすらぎ
あすからはまた
日々の暮らしのたたかい
子は子、父は父、母は母で
いのち新しく取り組む
そのひとときの前の
透明な時間

――連合通信から

石炭

石河鉄矢

あんやつに会った
だが
お互いにケロリとして
「昨夜はご苦労さん」
唯
一言で終った
でも
俺達は
もっと
もっと
討論を、そして激論を
また話合いを
続けるに違いない

よう！

繰込のサイレンがなる
カッターが待つ職場にいそぐ
今日も
俺の手で修理したカッターが
坑内で炭を掘るのだ　国内の
エネルギー源の石炭を
電気熔接の火が
ガス切断の火花が　とぶ
クレーンが走る
旋盤が回る
リズミカルなハンマーの音
歯車が太陽の陽射しを受けきらりと光る
絶間なく働く労働者の手で二十四トンのカッターは分解され
化粧直しが始まる
油に洗われ
ベアリングは取り替えられ
歯車はけずられ
続くカッターの手術
モーターはうなり
上下に大きくドラムは回転し
カッターは右に左に動く
坑外作業で　もっとも
喜びを感じるひとときだ
さあ　この力で、
石炭を掘ってくれ
朝日がのぼる
有明の海の中に悠然と立つ
堅坑やぐら
海底より深い地底で
カッターがうなる
日産二万トンの出炭をめざし
キャップランプの光の向うで
友のひたいに汗が光る
そして肩に、背中に……
真っ黒な顔の中で
獲物をねらうけもののような目が
炭壁をにらむ
炭鉱労働者の誇りに輝く目が
石炭を追い
カッターを追う
国の唯一のエネルギー
石炭
それを掘るのだ
鉄が　電力が待つ石炭
国民生活のすべての源泉
エネルギーとなる石炭
俺が修理したカッターがそれを
地上へおくる